

凛として生きる
ークリスチャンの八重

講演	山下 明子【やました・あきこ】
講師紹介	（公財）世界人権問題研究センター客員研究員 同志社女子大学嘱託講師

はじめに

ー女丈夫（じょじょうふ）ということ

私は同志社大学の神学部で学びましたが、キリスト教史が専門というわけではありません。ただ、この30年ほどアジアの女性と宗教の調査研究に関わってきましたので、アジアの女性の生き様にはとても関心があります。男性中心社会でもそれに屈しない知恵を出して、生き生きとリーダーシップを発揮している女性たちが、学歴を問わずに、どの社会にもいます。

今日のテーマである八重さんは、皆さんもご存じの通り、同志社大学と深い関わりのある人で、今年のNHK大河ドラマ「八重の桜」の主人公です。おそらく天国で八重さんが喜んでおられるだろうと思うのは、この放送を契機にして八重さんが同志社で再評価されていることです。私も共著で書かせていただきましたが、同志社女子大学の先生たちによる『新島八重ハンサムな女傑の生涯』が淡交社から出版され、版を重ねていますし、また、同じく同志社女子大学の新島八重研究会の先生たちによる『同志社の母 新島八重』という冊子が、これは広報用ですが、出ております。新島八重が創立者の妻としてこれまで同志社ではあまり評判の良くない女性だったことを考えると、歴史的な変化だと思います。

では、なぜ今、八重さんなのかということです。NHKが説明しているように、震災と原発事故で大きな被害をうけた福島の人たちを元気づけるため、ということはもちろんあるでしょうが、ここ10年間ほど日本は女丈夫ブームなのです。女丈夫というのは、男まさりの女、女傑、烈女というような意味です。下克上というか今までの秩序が崩れようとする時代、八重さんが生まれ育ち、活躍した時代である幕末から明治時代もそうでした。女丈夫と対になることは、ないしイメージは、今なら草食系男子、「草」でしょうか。社会的にも経済的にも女性にいろいろ頑張ってもらいたいときには、女丈夫は否定的なことばではないのです。だからと言って、男女対等、ジェンダー平等の時代だ、というわけではありません。

明治新政府は、明治4年に「散髪脱刀令」を出しました。男性や武士だけではなく断髪して下駄をはき、洋書をかかえた女子学生が「新しい時代」の風俗の先駆けになりました。しかし、明治政府は近代化、富国強兵の国家づくりのために、女の力を大いに活用しましたが、一方で、戸籍と家制度によって法律で女の力を押さえこみました。これが「女は内を治め、外を務めず」といわれる「婦道」（婦人のあるべき道）です。和洋中華の性道徳を巧妙に融合させたものです。この女性のモラルは新憲法によって家制度が廃止されるまで続きまし

たし、今でもその特徴が日本のジェンダーには色濃くあります。今日は皆さんにぜひ読んでいただきたいと思って、末尾にたくさんの関連参考文献を書いています。そのなかに田中彰さんの『明治維新と西洋文明ー岩倉使節団は何を見たか』があります。この明治初めの欧米視察団には、当時まだアメリカにいた新島襄が通訳として同行しています。正式の報告書は『米欧回覧実記』という膨大なものですが、この報告書をジェンダーの視点で読むと面白いのです。使節団は日本の近代化のためにと真剣に視察しているのですが、欧米の男女の関係、とくに女性の有様にはショックを受けて、我が国は「女は内を治め、外を務めず」であるべきだと書いています。

では、八重さんはどのような女丈夫だったのでしょうか。八重さんは現在の福島県、会津藩の砲術師範の家に生まれました。大河ドラマを見ている方はお分かりのように、男女の別が非常に厳しかった会津藩で、子ども時代から鉄砲に興味をもち、父の反対を押し切って兄から鉄砲を習い、その同士ともいえる川崎尚之助と結婚しました。会津藩の家訓には「女の意見は取り上げてはならぬ」、什の掟には「ならぬものはならぬ」というのがあるそうです。しかし、やがて戊辰戦争で会津城に男装して入り、断髪して銃をとって政府軍と闘ったので、「幕末のジャンヌダルク」とも称されます。

細身の綾瀬はるかさんが演じている格好良いドラマを見ていると、八重さんは常に周囲から賞賛されてきたかのように錯覚しますが、事実はそうではなかったでしょう。女だてらに才気煥発で、小柄で太っており、すでに13歳で60キロの米俵を4回も持ち上げたというほどの力持ち。指が太いので女の習い事の裁縫は苦手だったというエピソードもあります。

「女だてらに」、「烈女」、「ヌエ」、「悪妻」などと周囲から批判されながら、それでも凛として明るく、時代にも負けずに自分を生きた女性だと思います。そこに八重さんの魅力を感じます。彼女を理解して支援した兄の山本覚馬の存在、そして山本家の家付き娘で、息子の覚馬が自分よりも聡明だと言った母・佐久さんの存在も大きいです。そして最初の夫の川崎尚之助、再婚相手の新島襄。彼女は周囲の男性にも非常に恵まれましたが、それは彼女自身が引き寄せたとも言えます。

「八重さんは生き方がハンサムな女性です」。これは新島襄が「アメリカの母」であるハーディー夫人に婚約を知らせた手紙のなかのことばです。本当に的確で素敵な紹介のしかたです。

八重の洗礼

戊辰戦争で会津城が落ちます。会津藩士は他藩の預けとなり、やがて現在の青森県東部の大変な僻地に斗南藩として藩の再興を許されるのですが、藩士が食べられるような土地ではなく、多くが他藩に出稼ぎに出ています。八重さんは城が落ちるときに、母や兄嫁、姪の世話をするために女として夫や男性の藩士たちと別れますが、その後、山形の米沢藩で父の砲術の弟子宅に世話になりながら働いて食べていたようです。京都の三条河原で打ち首になったと聞いていた兄の覚馬が薩摩藩による幽閉を生き延びて、しかも京都府顧問になっているとの知らせで、八重さんと母、姪が京都に向かったのは、明治4年、八重さんが満で25歳のときです。

その翌年の明治5年に、日本で最初といわれる女子教育の場である「新英学校及び女紅場」（府立第一高等女学校の前身、現在の府立鴨沂高校）が始まります。八重さんは兄のお陰もあるでしょうが、そこで舎監の職を得ます。舎監をしながら、礼法と機織り、習字などを教え、自身も英語を学びます。新島襄と再婚するきっかけになるのは、この舎監の仕事で学生たちのために横村正直（後の京都府知事）に会いに行つて、いろいろと果敢に交渉したからです。横村は八重を「烈婦」と評し、日本的で夫に従順な女性を望まないという新島に結婚相手として推薦しています。

新島は明治7年にアメリカから帰国後、当初は大阪でキリスト教主義の学校をつくらうとするのですが、うまくいかずに翌年に京都へ来ます。そこで山本覚馬と出会い、リベラルな教育の場を共につくる同志となって、京都での同志社英学校の創立につながるわけです。しかし、当時はキリシタン禁制の高札が撤去（明治6年）されてまだ間もないころです。とくに京都は伝統仏教の本山がひしめく土地ですから、新政府が出した神仏分離令や廃仏毀釈で、仏教界のフラストレーションが極まっていたから、西洋のキリスト教に対する敵がい心や恐怖心も強かったのです。

明治維新と共に皇室と公家が東京へ移り、京都の中心、広い御所が空になっていたことも、京都がさびれることへの強い不安感、西洋化への不信感になっていたでしょう。そのようななかで八重さんは新島と出会い、プロポーズされて婚約します。舎監をしていた学校も案内していますが、キリスト教の宣教師と婚約したことで、舎監を解雇されます。横村正直は仏教界からの批判が強いために、新島がキリスト教主義の学校をつくることに反対し、対立していました。

兄の影響で早くから洋学に親んでいたとはいへ、周囲から恐れられていたアメリカ帰りの宣教師と結婚する決意は、当時の普通の日本女性なら、とても難しかったでしょう。そのような周囲の冷たい空気のおかげで、明治9年1月2日、八重さんはデイヴィス宣教師から洗礼を受けました。京都で初めてのプロテスタントの洗礼で、そして翌日のキリスト教式の結婚式です。キリスト教徒でなくてもチャペルでキリスト教風の結婚式を挙げる女性が多い現在では考えられないことです。

ちなみに、NHK大河ドラマが契機になって一番研究が進んだのが最初の夫の川崎尚之助についてです。これまでよく分かっていなかったのです。尚之助を演じた俳優の長谷川博己の人氣もあったと思います。追っかけファンもいて、尚之助の出身地の出石や東京の墓参りに行ったという女性もいます。新しい研究成果によれば、川崎尚之助は明治8年に東京で亡くなっており、八重さんが新島と婚約するのはその死後ということになります。ただ、一般の庶民ではなく江戸時代でも名字のある藩士の家の生まれなので、八重さんの戸籍は、山本八重から川崎八重に、そして京都へ移住後は山本八重に戻っており、それから新島八重になっていますが、いつ正式に離婚になったのかは分かりません。中国では烈婦とは「女は二人の夫にまみえない」という意味ですが、日本の性道徳と烈婦にはそういう意味はありません。むしろ、女は家を支える役割を担わされたので、士族の娘の離婚と再婚は珍しいことではありませんでした。むしろ八重さんがそうだったわけではありませんが。

私が言いたいのは、「八重さん」というのは、新島が妻を呼んだ呼び方ですが、これほど相応しい呼び方はないということです。ちなみに八重さんは夫のことを「ジョー」と呼ぶように求められ、そう呼んでいます。そのような新島だからこそ、八重さんはキリスト教の洗礼を受けて再婚することも決めたのでしょう。

八重の信仰と

キリスト教理解

では、八重さんは夫のためにキリスト教に入信したのでしょうか。そうではないと思います。キリスト教の教えは教派によっても異なりますが、その中心にイエスの十字架があります。イエスは十字架で処刑されたのですが、私たち信徒はそれぞれが自分の十字架を背負うことで、イエスと共に生きています。苦しいはずのそれを抱えることによって希望が、あるいは抱えたまま生き直すことができます。

八重さんは戊辰戦争で可愛い弟と父を亡くしました。自分が鉄砲の使い方を教えた少年をふくめて白虎隊や長刀（なぎなた）で政府軍と闘った娘子隊も、自刃したり殺されました。1カ月間、外から大砲を撃ち込まれながら闘った会津城のなかでも夥しい死者や負傷者、また敗戦によって自刃した家族を見えています。武器をとった八重さんにとって、その後の流浪の日々も含めて会津藩が被った屈辱、大切な人たちの死は大変な無念と悲しみ、喪失感だったろうと思います。

八重さん自身が自分の信仰について詳しく書いたものがほとんど残っていないので、本当のところは分かりませんが、八重さんにとっての十字架はやはりこの会津の死者たちだっ

たでしょう。京都へ来てからは、八重さんらしく新しい時代へと希望をもつことができたとは思いますが、新島と出会い、キリスト教と出会うことによって、会津の死者たちとつながり直すことができたのではないのでしょうか。

結婚後の信仰生活では、夫の襄というモデルがいました。男尊女卑の考え方が強い時代に、新島は妻を対等に扱いましたし、妻にもそれを求めました。新島は妻だけではなく、同志社英学校と女学校の学生たちに対しても、周囲に対しても、誰に対しても四民平等の考え方をリベラルなキリスト教の理念として実践しました。八重さん自身の信仰は、十字架理解にしても理念というよりも直感的、身体的だったと思いますが、尊敬する夫と共にいる間は、家庭生活でも、伝道生活でも両者がうまく融合していたことでしょう。

ところが同志社の先生、当時はほとんど全員がアメリカから送られてきた宣教師だったわけですが、それに男子学生たち、とくに熊本洋学校から同志社にきた学生たちは、理由は異なりますが、それぞれに八重さんの振る舞いを批判しました。

八重さんは結婚するとすぐに宣教師夫人とともに女子のための私塾を始めます。それが自然消滅した後に、さらに女性宣教師とともに女子塾を開き、明治10年4月には、同志社分校女紅場（後の同志社女学校）が開校します。八重さんはそこで礼法を教え、お母さんの佐久さんが女学校の寮の舎監になりました（明治16年まで）。佐久さんはとても聡明な方だったそうですが、佐久さん母娘と女性宣教師たちとの間に軋轢が生まれます。八重さんは校長の妻として、日本式の裏方の役割ではなく、対等なパートナーとして学校や女子寮の経営に意見を言ったからでしょう。しかし、アメリカで大学を出て教員の資格をもつ宣教師たちにはプロとしての自負がありました。資金もアメリカから出ています。

また、熊本から来た学生たちにとっては、尊敬する新島先生を皆の面前でもジョーと呼び捨てて対等に振る舞う八重が我慢できなかったのでしょう。洋学校で学びクリスチャンになっても儒教的な男尊女卑の考え方は変わらなかったのでしょう。後の徳富蘇峰と蘆花の兄弟たちは、和服に大きなつばの帽子をかぶり、ヒール靴をはいた八重さんを「ヌエのような女だ」と批判しました。ヌエは八重さんのあだ名になったようです。

当時、妻は夫の一步後ろを歩くのが普通でした。教会でも同様で、女性は内助者、夫に仕えるのが妻の役割だとして、キリスト教の婦徳が説かれました。しかし、二人は手を取り合って散歩し、並んで人力車に乗ったそうです。慣れないことなので、内心に葛藤はあったかもしれませんが、世間の目に物怖じしなかった八重さんは偉いと思います。八重さんの十字架とキリスト教の理解がここにもあらわれているのでしょう。

夫の死後の信仰実践

明治23年1月に新島襄が大磯で亡くなります。病身にもかかわらず同志社を大学にするために奔走したのが死期を早めたのかもしれませんが。新島は京都から駆けつけた八重さんに「グッドバイ、また会わん」と言われたそうですが、八重さんはこのときまだ44歳でした。どれほど悲しかったことだろうと思います。しかし、新島の死後に、八重さんの新たに自立的な人生の歩みを見ることが出来ます。これが八重さんの信仰実践だと言えるでしょう。

夫の死の3カ月後に、日本赤十字社の正社員になった八重さんは、同志社との関係よりも、元会津藩の人たちとの関わりを回復しながら、より社会的に活動していきます。赤十字での篤志看護婦の活動がその一つです。明治27年に起きた日清戦争では、50歳で従軍看護婦となり、広島陸軍予備病院で若い看護婦と寝起きしながら、夥しい負傷兵の治療にあたっています。当時、看護は男性の仕事でした。女性が病院で看護の仕事をして、社会的には賤視されていました。そこで、日本赤十字社が専門的な看護婦養成所をつくり、日清戦争でも負傷者の看病に当たりました。その中心的な働きをしたのが、元会津藩家老の山川浩の妹、大山捨松（咲子）です。「アメリカでは看護婦は医師と同じに重んじられています」と言っていて、養成所設立の協力者を募ったのです。資金集めのための「婦人慈善会」もつくりました。

大河ドラマを見ている方は、秋吉久美子さん演じる山川家の母や姉の二葉さん、長男で八重さんの幼なじみの大蔵（後に斗南藩の家老となり浩と改名）や弟の健次郎（後の東大総長）などと共にご存じでしょう。戊辰戦争で会津城に籠もったとき、咲子さんはまだ9歳で、母や姉たちが負傷者の手当をしているのを見ていました。明治4年の岩倉使節団と共に12歳で訪米した捨松（娘を捨てて待つ、という意味で母の命名だそうです）は、23歳で帰国したのですが、アメリカで看護学も学んでいました。しかし、帰国しても日本ではキャリアを活かせる女性の仕事がなく焦っていたところに、薩摩閥で陸軍大臣の大山巖に請われて結婚します。大山も同じく留学経験があって年齢は違っても気が合ったのと、夫の地位を活かせば活動できると考えたからだそうです。

八重さんは60歳で日露戦争でも従軍看護婦となっています。日赤で篤志看護婦の資格も取っています。同志社にも新島が始めた京都看病婦学校と同志社病院があったのですが、夫の死後、なぜ同志社ではなく日本赤十字社に関わっていったのかについては、同志社病院が新島の死後、困難な状況になったことなど、いくつかの理由はあるのですが、私は八重さんの会津戦争の体験、そして大山捨松さんと山川家など元会津藩の人たちとのつながりが大きいように思います。

八重さんは子どもを産まなかったのですが、夫の死後、三人の養子を育てています。そのうちの二人の女の子は米沢藩士の子供です。同居して面倒をみていた義父母も亡くなり、母や兄の覚馬も亡くなった後、八重さんは孤独だったと思います。もし八重さんが教会生活をしていれば違ったかもしれませんが。八重さんは夫や女性宣教師と共に日曜日に伝道に出て、オルガンを弾くことはあっても、定期的に決まった教会の礼拝に出席していませんでした。日本の教会は小さいので、アメリカのように教会が地域とひとつ、教会での婦人会活動がそのまま地域の活動になるわけではありません。その意味では閉ざされています。反耶蘇の感情が強かった当時は特にそうだったでしょうから、性格的に八重さんには合わなかったのだろうと思います。

八重さんは看護婦としてだけではなく、「京都婦人慈善会」でも約20年間、活動しています。新島の存命中から慈善事業には関わっていたのですが、夫の死後にこの会の幹事になっています。これについては、先ほど紹介しました同志社同窓会編で出しました本のなかで坂本清音先生が書かれています。八重さんの場合は、矯風会のようないわば社会改良型の活動ではありませんでしたが、弱い立場の人たちをボランティアで支援しようとしたことでは、篤志看護婦の働きと共通しています。

また、女性のための教育に熱心だったことも、新島と結婚後の家塾から女子塾、同志社分校女紅場、女学校と一貫していますが、篤志看護婦となった後は、看護学をすべての学校が取り入れるべきだという働きかけもしています。八重さんのキリスト教は、女性の自立という意味で実践的ですが、時代的な制約はありました。明治政府が敷いた家制度の下で、先に言いましたような「女は内を治め、外を務めず」という女性役割のロールモデルとして、皇室、特に皇后の熱心な働きがあったわけですが、八重さんもそのモデルになりました。本人が喜んだかどうかは分かりませんが、八重さんはそれまでは皇族しかもらえなかった勲七等および勲六等の宝冠章を日清戦争後と日露戦争後に民間女性として初めて受賞しています。従軍看護の働きによるものです。

仏教との宗教対話

八重さんはまた、お茶の世界では茶人として名が知られているようです。86歳で亡くなるのですが、その3日前にもお茶会に出ておられ、生前最後の写真が、そのときに撮られた茶人姿のものです。先にも触れました私たちの本がお茶の本で有名な京都の淡交社から、たくさんの方のきれいな写真入りで出たのも、そのおかげです。

明治初期は武士社会が終わって、しかも皇室とお公家さんたちが東京へ移り、中心の担い手がいなくなったので、京都の茶道がさびれていたとまでできず。そして、これまでは男性、それも西陣などの旦那衆の祇園などでの茶屋遊びと一続きの芸事だったお茶を、八重さんは女性たちに教えて広めたことでも知られています。私はお茶の世界のことはまるで知りませんので、お話しするのは研究会などで教えていただいたことです。

八重さんが家元から授与された茶名は新島宗竹ですが、宗は家元の千宗室の宗として、普通はその後に本人の名前の一字がつきます。ところが八重さんの場合は本名ではなくて、宗竹です。これは誰の名前なのか、ということになります。実は夫が亡くなった後の2月10日に八重さんが亡方を偲んで詠んだ歌があります。「たのみつる竹は深雪に埋もれて世のうきふしをたれとくたたらむ」ですが、おそらくこの竹のことだろうと推測されています。また、八重さんは自宅に茶室「寂中庵」を作って、お茶会をしたり、教えたりしたのですが、この茶室は一般的なものとは異なって、庭に向かって明るく、天井も高く、外側はもとの洋室のままという造りです。その隣は夫の襄の書斎で、八重さんは生前のままにされていたそうです。

お茶は元来が禅宗のお坊さんによって中国から日本に伝わったものですから、お寺とのつながりが深いのですが、一方で、茶道を開いた千利休はキリシタン大名など、当時のキリスト教徒とのつながりがとても深く、茶道の様式にはキリスト教のミサの影響があるだろうと言われてます。

夫の死後、とくに晩年の八重さんは茶道三昧になったようですが、お寺での茶会も多く、「新島未亡人は仏教に改宗した」という噂が流れます。アメリカの宣教会にまで噂が伝わって、八重さんは批判されることになります。最初に述べましたように、同志社周辺で近年まで新島八重の評判が良くなかったのは、もっぱらこの理由によります。しかし私は、八重さんはボランティア活動においても、茶道においても、また仏教との出会いにおいても、八重さんのキリスト教信仰と矛盾することなく、一貫していたと思います。

明治の初めに京都で万国博覧会が開かれます。このときに英語のパンフレットを作るなど、新島と八重さんは活躍するのですが、博覧会場の一つになったのが建仁寺です。この建仁寺の管長だった竹田黙雷和尚との出会いが、晩年の八重さんに精神的な力を与えたようです。この和尚さんから「寿桃大師」という法名と袈裟をもらっています。これがスキャンダルとなり、「キリスト教を捨てて、禅宗に帰依した」という批判の種になったのですが、今ならば、キリスト教の神父や牧師であっても、茶道を習い、寺で座禅をする人は西洋にも日本にもいますし、法名をもらっている人もいます。むしろこれを批判する人もいますが、現在では学問的にも宗教間対話は八重さんのころよりもはるかに進んでいます。

八重さんは亡くなる20日前に、この和尚について「貴女は耶蘇教で固まっておるから、私から教えることは何もない。ただ遊びにおいでと仰言ますので参っておりますが、いつも下腹に力をいれなくてははいけなと仰言まして、老師はいろいろと教えて下さいました」（同志社社史資料室『同志社談叢』第20号 同朋舎 2000年）と「懷古談」で語っています。八重さんは、会津で砲術とともに型を重視する小笠原流礼法を身に付け、それを京都の新英学校・女紅場と同志社女学校でも教えていました。新島の死後の孤独のなかで、同様にしっかりと下腹に力をいれることで精神的な自在さを得る茶道と座禅に出会った、あるいは出会い直したのではないのでしょうか。

八重さんの十字架の理解は理念的というよりも身体的ですから、このことは八重さんの信仰のなかで矛盾なくつながっていたらと思ういます。私は、はじめに申しましたように長年、アジアの国々で女性と宗教の調査にあたってきましたが、八重さんのようなクリスチャン女性に出会います。学歴のある方も無学の方もいますが、智慧があることでは共通しており、私はこのような方たちから一番教えられます。私自身が仏教の家庭と土地で育ち、結婚後にキリスト教と出会って神学を学びましたが、アジアの国々で土着の宗教と出会い直すことで、私のキリスト教信仰を深めることができたからかもしれません。

八重の魅力

一自分らしく

凜として生きる

八重さんは生い立ちからの明るく、前向きな性格の上に、兄の覚馬を通しての洋学および最初の夫の川崎尚之助もそうですが、当時の革新的な男性たちとの出会いがあります。それから父と兄が砲術師範だったことも大きいと思います。それまで戦で鉄砲を使うのは足軽の役割でした。とくに武士階層が誇り高い会津藩では弓矢と剣術、女性は長刀が訓練の中心でしたから、鉄砲の位置付けは低く、戊辰戦争で会津や東北諸藩連合が数の力では勝りながらも政府軍に負けたのは、薩摩と長州藩が持っていた西洋製の近代的な銃器が原因だったと言われます。こんな会津藩で開明を図る兄や夫と苦労を共にしてきましたから、八重さんには弱い立場の者への共感と近代化に対する認識の両方がありました。

22歳の若さで戊辰戦争に巻き込まれたとき、亡くなった弟の衣装で男装して積極的に銃をとって闘いました。無念の降伏によって、激しい怒りと屈辱感を体験したにちがいありません。しかし、京都で新島襄と出会い、クリスチャンとなって再婚し、女性も教育を受けて参加できる新しい社会をつくるために、夫と共に再出発しました。八重さんはジャンプする勇気をもった女性でした。

そして、夫との死別後は、さらに自立的な一歩を踏み出しました。下腹に力をいれて、凛として社会のなかで生きること。そして、晩年の八重さんは和服で通し、もう「又エ」と揶揄されることはありませんでした。むしろ、夫の遺品ともいうべき聖書と茶道により、柔らかな安心（あんじん）の世界を生きられたのではないのでしょうか。

昭和7年6月、日本が15年戦争に入っていく入り口で、八重さんは86年の生涯を静かに閉じられました。魅力的で幸せな女性だと思います。

〔関連参考文献〕

吉海直人「『新島八重子刀白懐古談』の紹介（全文翻刻）」『同志社談叢』第20号 同朋舎 2000年

永澤嘉巳男編『新島八重子回想録』同志社大学出版部 1973年『同志社女子大学125年』同志社女子大学 2000年

本井康博『ハンサムに生きる』思文閣出版 2010年

由良弥生『新島八重と維新一会津に咲いた八重の桜』文芸社文庫 2013年

関口すみ子『御一新とジェンダー―荻生徂徠から教育勅語まで』東京大学出版会 2005年

辻ミチ子『女たちの幕末京都』中公新書 2003年

田中彰『明治維新と西洋文明―岩倉使節団は何を見たか』岩波新書 2003年

秋定嘉和『人権から見た近代京都』世界人権問題研究センター 2012年

トマス・ラカー著、高井宏子・細谷等訳『セックスの発明―性差の観念史と解剖学のアポリア』工作舎 1998年

富坂キリスト教センター編『近代日本のキリスト教と女性たち』新教出版社 1995年

山下明子『アジアの女たちと宗教』解放出版社 1997年

キリスト教女性センター編『女・生きる～「女生神学塾」運動～』かんよう出版 2013年

同志社同窓会編『新島八重 ハンサムな女傑の生涯』淡交社 2012年

2013年5月28日 同志社スピリット・ウィーク春学期
京田辺校地「講演」記録